

審査結果の要旨

本論文の内容は、公開審査会（令和3年2月16日10時から12時、於京都府立大学文学部会議室）において説明がなされ、質疑応答が行われた。山本論文の研究史上の意義と、審査会で提出された論点は以下の通りである。

○研究史上の意義

中世寺社権門は、中世国家を構成する権力体であり、宗教および経済活動を通じて社会に影響を与える組織として認識されている。寺院については、顕密体制論・寺社勢力論の提唱により、摂関・院政期を通じて権門化する個別寺院の動向の解明が進展し、組織構造や所領支配の展開が把握される一方、仏教の普遍的性格を前提として、宗派史研究を超えた教義・思想と政治イデオロギーとの関係解明が進められている。これに較べ、神社は、個別神社史研究が立ち後れるのみならず、また仏教に主軸を置いた神仏習合の研究により、寺院史に従属する神社史の位置づけから脱していない。なかでも伊勢神宮は、信仰と組織・所領支配の研究が分断されているため、中世権門化の過程を描き出すには至っていない。中世伊勢神宮の研究は、日本宗教史上の盲点ともいえる状況にある。

本博士学位請求論文は、伊勢神宮の中世化の解明に取り組んだものである。まず伊勢神宮の経済基盤である御厨・御園の形成および古代神部の荘園化の過程を神宮組織の展開・京都の貴族層・在地領主層の動向と関連づけて実証した。その際、朝廷による伊勢神宮優遇策の視点を導入したことで、天下宗廟たる神宮領の特質を指摘し、中世権門としての基盤整備の展開過程を、国家政策と荘園社会の動向のなかで説明することに成功している。また中世前期における口入神主による祈祷や神宮法楽が、私幣の禁じられた伊勢信仰の枠を社会各層に広げる起爆剤になったことを明らかにし、伊勢神宮が開かれた信仰の対象に転換したことを指摘した。以上のように山本氏の学説は、伊勢神宮の中世化の過程を政治・経済・宗教の側面から多角的に論じており、今後の中世神社史研究のモデルを提供して

いる点に、研究史上の意義が認められる。

○審査会で取り上げられた主な論点

序章 国家的神祇政策との関連の説明不足、「大衆化」の語義の問題点、寺院史研究との比較検討

第一部

第一章 朝廷の神社保護政策との関連、神宮闕所地分配の史料解釈

第二章 変質した「口入所」の実態への疑問、大衆化と復古との関係

第二部

第一章 在地領主層の動向の解釈

第二章 神明社と蔵の関係

第三部

第一章 異国調伏の位置づけの不十分さ、建治元年法楽舎設置の意義

第二章

終章 「イデオロギー装置」説への疑問、伊勢神宮の特殊性の評価

本論文は、伊勢神宮の権門化の過程を信仰の「大衆化」に収斂させる一面的な描き方をしている点に若干の課題を残しているものの、中世化の諸要素を関連させて合理的に説明することに成功している。このような研究史上の意義に鑑み、本論文は博士の学位授与の評価基準を満たしていることから、本委員会は本論文が博士（歴史学）の学位を授与するに値するものと認める。